ヤマンバ（山姥）とだんご石

むかしむかし、大塩のまえ山に、一人のヤマンバが住んでいました。ある大きききんの年、村人は、秋になってもいくらも米がとれず、たべるものがないので、はらをすかし大変こまっていました。

ある日、一人の坊さんが、はらをすかしヨロヨロとしながら、何かたべるものがないかと、山へさがしに行きましたが、たべられるものはすべてとりさったあとで、ひとかけらのたべものもありませんでした。

そして、山をフラフラと、疲れた身体をひき摺って歩いていくと、ヤマンバの家の前